

備後燃糸

# 和紙糸でサステイブル貢献

## 協業で開発進める

燃糸業の備後燃糸（広島県福山市）は、自販する和紙糸を生かして原料にさとうきびの搾りかすのバガスを混ぜ込むなどの開発でサステイナビリティへの貢献を加速させる。光成明浩社長によると、「受託加工だけの待ちの姿勢を脱却し、和紙糸で攻めに転じる」と話す。

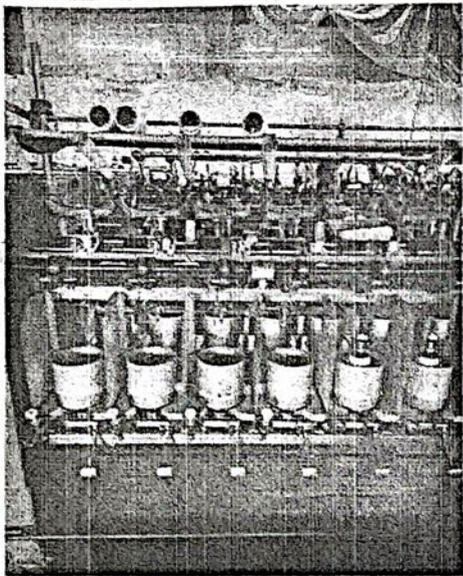
同社は、20〜30番手の燃糸を得意とする。ダブルツイスター12台、アップツイスター10台、リングツイスター5台、ワインダー5台を備える。糸の撚りが戻ろうとして糸がよじれるスナールを解消する用途などに使うピートセット機も持つ。

2009年に和紙事業部を立ち上げ、環境負荷の少ないアバカ（マニラ麻）を原料とした和紙糸「備和」の自販に力を入れてきた。受託加工は減少傾向にあるものの、自販糸の販売を売上高の約60%を占めるまで拡大させ、売り上げを維持してきた。

現在開発に取り組んでいるのが、バガスの活用だ。地域創生事業のRinnovation（リノベーション、東京都千代田区）と協業で、本来廃棄されるバガスを和紙糸の原料に混ぜ込むことでサステへの貢献度を高める。

と取り組むのは、食品包装紙の再利用だ。スイスの食品会社、ネスレの包装紙を回収し再利用する。既に和紙糸の原料に使う技術は確立したが、混率を高めるため開発を進める。

さらに、旭化成とキエプラを原料に使った不織布を和紙糸にするなど多面的な開発を進める。これらの自販による体質の変更に、2024年3月期は2期連続の黒字を確保した。



20〜30番手の燃糸が得意

利用可能な資源を有効活用するためのプラットフォーム「オームアップサイクル」